

## 手ぬぐい

ぼくの家のたんすの引き出しには、一枚の手ぬぐいが大切にしまわれている。「第二回音戸の舟唄全国大会出場記念」として、参加者全員に配られたものだ。その手ぬぐいを見ると、音戸の町の代表として、小学校のみんなと心を一つにして歌った時のことが思い出され、ほこらしい気持ちになる。

（だけど、なぜ、出場記念が手ぬぐいだったのだろうか。タオルの方がよかったのに。）

長くてうすいぬのに印刷された船頭さんの絵と「音戸の舟唄」の歌詞を見ているうちに、ぼくには、だんだんそのことが不思議に思えてくるのだった。

夕方家族で食事をしていた時、ぼくは、父にたずねた。

「お父さんは、手ぬぐいとタオルのどっちがすき。」

「そうだな。汗をふいたり手をふいたりする時にはタオルがいいな。お風呂から上がったって体をふく時はバスタオルがしな。でも、父さんは大学時代、落研おちけんに入っていたから、手ぬぐいには特別の思いがあるんだよ。」

「えっ？『落研』って何なの。」

「落語研究部っていうクラブだよ。」

「あの落語？」

「父さんがよく聞いているだろう。あのおもしろさって友哉ともやには分からんだろうな。」

そういうと父は手ぬぐいを取りにもどって、丁寧にたたみ始めた。

「これがいろんな物に変わっていくんだ。本、さいふ、どんぶりとかな。」



父は得意になっっているんなしぐさをし  
て見せた。  
（手ぬぐいって、何だか魔法にかけられ  
たみたいだなあ。）  
父の話聞いて、ぼくは手ぬぐいにつ  
いてもっと調べたいと思った。

よく日、ぼくは図書館に行った。そし  
て、「日本の伝とうと文化」という本を、  
受付でしようかいしてもらって読んだ。  
本によると、手ぬぐいは江戸時代には  
反物たんものから注文に応じた長さを切り取っ  
て売られていたそう。この時代、人々  
は着物のおしゃれを楽しんだので、様々  
なもようの手ぬぐいが生まれ、使われ方  
も広がった。祭り、日本舞ぶよう、落語な  
どの小道具、贈り物や記念品。ぼくがも  
らった手ぬぐいも、大会をお祝いして配ら  
れたことが分かった。  
また、軽くて洗ってもすぐ乾かわく手ぬぐ  
いは、手や顔をぬぐったり、仕事や体  
をきたえる時には頭に巻いて使われ  
たりして、とても重宝したそう。

家に帰って、ぼくは調べた手ぬぐいの  
よさを父に話した。父は、ぼくの話  
を聞きながらこんな話もしてくれた。  
「手ぬぐいは切りっぱなしで、はしを  
ぬってないんだよ。げたやぞうりの鼻  
おが切れた時、はしをさいて鼻おの代  
わりにしたんだ。けがをした時も包帯  
として使ったんだよ。」

ぼくは、もう一度、出場記念の手ぬぐいを出して見た。  
手ぬぐいが、いつもより輝かがやいて見えた。



日本手ぬぐい

